高崎氏――今日は倉橋先生は御病氣、小川先生は御用事で結局、山下先生、上村先生の御二人に御話願うことに致します。

○しつけの心理的基礎

東京家政大學教授　山下俊郎

山下氏――ちよつと忙しかつたので、充分に考えを整理して申上げられませんので、思いついたまゝを、坂元先生からいただきました五分もつかつて、出來るだけお話いたします。今、訓練と自由の問題について坂元先生がはつきりした整理をして下さいましたのでお話しよいのですが、私のいゝたい事は、躾という問題を心理學的立場から考えてみたいと思います。

躾ということは、訓練ということにあたると思います。こゝで躾の言葉の意味をせんさくするより内容の方を考えた方がよいから、すぐ内容にはいりたいと思いますが、その前に私の考え方を申上げると、子供をそれ〴〵の個性に應じてのばすのは、今日の積極的な考え方の根本原理でありますが、私はいつも逆の方向から考えていました。子供は年齢によつて發達がちがう。そこに重點をおけば、例えば二、三、四、五と子供の年齢がふえるに從つて、與えることが消化される一つの限界がある。もう一つ逆のことをいうと、何歳では何が出來るかという大體の標準がある。標準という見かたでは、ある子供が生れてから今まで持つてきた事と、檢査とを土臺にして何歳ならこの位のことを躾けられてもよい、即ち要求してよいという最低限度が考えられます。そういうことからいうと、さつき積極的というのに反對の方から考えていたといつたのは、個性をのばすその前に土臺として一つの教育的要求があつて然るべきだと思います。大體一般の子供の生理的心理的發達を考えると、やはり年齢にしたがつつて發達している。この發達に應じて最低限度の與えるべきものを與えるのが我々教育者のつとめであると思います。つまり、子供の成長發達に應じて、我々が一體どこで、どういうことをどの樣に與えるかという問題が次に出てくる。どういう方向の事をどういう方法で子供に與えるか、この二つの問題が躾を解決する鍵であります。

今日、躾というものを、子供の自由を束縛するものだとか、無理に押しつけるものだとか、いう人があるが、さき程坂元先生が整理して下さつた樣に考えればかたづく問題であります。幼兒の成長發達の過程は、極めて自然であります。子供は一定の時期になると成熟してくる。自分の内に持つていた生れながらの芽生えが展開することに加えてその芽生えが後天的にまはりから與えるものによりぐん〴〵のびることをいいます。このまはりから與えるというのは結局、子供をとりまく社會が與えるので、この意味で、子供に生活の仕方を身につけさせるのは周圍の文化的環境である。そして、子

供の成長發達に從つて文化的環境に次第にはめこんで行くのが躾の過程であります。

アメリカの心理學者ゲゼルの本をよんでいたら、我々のいう躾という言葉にあたる言葉として acculturation という言葉が出ていました。文化の方へ引つぱつて行くという意味で、新らしい考え方の中にこの意を見出して、私の考え方を支えられた氣がしてうれしかつたのですが、躾というのは、生理的、心理的な發達過程に於いて、文化的生活に引入れる一つの方法であると考えられます。

前から私の話をお聞きの方には、繰返しで耳にたこが出來るでしようが、食事とか睡眠とかいう生活の基本的な躾を子供に與えるのは、我々の社會に入るに當然教えねばならぬ一つのしつけであのと思う。躾の方向に對する心理的根據は大體以上の樣なことで、次に躾の方法という點では、躾を、無理押しにおしつけるものと考えて、躾を好ましくないという人もあるが、しかし私は口やかましくいうというのは方法の問題であり、よい方法とは思いません。躾という言葉が押つけることや口やかましくいうことを聯想させるなら、躾といはず、生活指導といえばよい。方法についての根本の考え方は、生理的、心理的發達に即してやつて行く、無理のない行き方がよいと思います。

幼兒の發達をみていると、それ〴〵の時期により新らしい營みが出てくる。そういう時には、どんどんその方へと發達している時でつて、その營みを繰返すことにより、更にそれが成長發達して行くことが出來る。例へばボタンをかけるということについてみれば、三——四歳でいぢくる事に興味をもつてくる。これは指先の運動が發達するからいぢくるので、これを利用して、ボタンをかける樣にしむけるならば、身にたやすくついて行く筈であります。つまりこの樣な時期によく注意して觀察していれば、將來の文化生活に引入れて行く芽生えを見出して、それをその子供の身につけてやる樣のばすことが出來るのであります。

もう一つは、いろ〳〵の習慣を身につけるためには、習慣は毎日それ〴〵の生活の場に於いて、それが繰返えされる度にその場に於ける行動が固定して行くものであります。だからある習慣とか躾とかを身につける爲には毎日規則的な生活の中に同じことをさせなければならぬというのが根本の原理であります。同じ事を反覆する事も、心理的に言う「一つのちやんとした形」ある行動の形が出來上るのは行動のことで、例へば「齒をみがく」というのは行動の形が出來上つたといえる。これが回數を重ねて、自然に動く樣になれば「自動化」又は「機械化」したと云えます。

毎日々々なさい〳〵と强引に押つけることで躾をしなければならぬか、又は發達に應じて無理なくする樣に指導するか、こゝに方法の違ひがあり、必ず子供の感情的なものがつきまとつてくるから、やろうという氣持を誘い出すための手段を講ずることが大切で、喜んで出來る雰圍氣を作らねばならない。

躾の問題について心理的基礎について考えれば、決して無理押しに押しつけるものではありません。坂元先生が問題になさつた樣に一つの段階を取り上げたことになります。

結論を言えば、子供の成長發達の過程に於いて、どの子供にも一應與えるべき躾があり、これは押しつけや無理强いをしなければ個性をのばして行くことゝ決して矛盾はしない。但し幼兒に於ける躾はその考え方に於ては、どこまでも嚴格でありたいと思つています。

時間も過した樣ですからこの邊で。（拍手）

司會者——最後に上村先生にお願い致します。先生は兩親教育に大きな貢献をしていらつしやる方であり、その一方幼兒のためにもいろいろ研究しておられます。

○訓練と自由

日本女子大學　上村哲彌

上村氏——先づ最初に結論を申上げますと、「しつけと自由とは互に對立し、排除しあうものではなくて、相互に補い合うものであり、從つて幼兒教育においては、兩者は手をつなぎあつて行かねばならぬ性質のものである」という、常識的な立場を、私は取つているものであります。ところがこのような見解は、どちらかと申せば常識的ではなくて、しつけと自由とは互に相反するものであり、相互に兩立しがたいものであるかのように考えられがちであります。とくに終戰後においては、日本人の社會が、民主々義的なものへと急轉回させられましたが、民主主義的な思想や、生活樣式に對しては、元來不慣れな日本人のことでありますので、自由としつけとの關係に對する考へ方に混亂をきたし、子供の取り扱いや、教育の衝に當る、兩親や、教師たちの間においても、子供に對して與えらるべき自由の限度や、彼れらに對して加えるべきしつけの限界、竝にこの兩者の間の調節についての迷いが、一層大きくなつて來ている、という實狀のようであります。終戰直後においてはとくにその傾向がはなはだしく、自由と放任とがはきちがえられ、しつけや訓育という言葉は、民主々義教育のタブーであるかのようにさえも、あやまり信ぜられることがしば〳〵あつたのであります。

前にのべたようにほんとの自由とは、申すまでもなく、單に外部からの束縛や、强制がなくなるということではなくて、われわれ人間が、自律的に內から自分自身を、支配することの出來る狀態を指すのであります。生れながらの衝動的な欲求をむき出しに、さらけ出すぶしつけな野性的自由ではなくて、しつけられた自由、しつけを通して獲得された自由こそ眞の自由であります。これを他の面から說明すると、幼兒のしつけとは、自分自身の行動（言葉をも含めて）に對して道德責任をとることのできる人間に子供を育て上げることであり、他人から命令されたり、外から支えられたりするこ